知る力の意味

澁井　惇

ドミニカ共和国派遣団としての活動は過ぎてみればあっという間であったが、その充実した日々は時間的な感覚ではなく教科書や文献の中に飛び込んだかのように学びや発見の連続であった。決して色褪せることの無い記憶の中で特に印象に残った訪問地での経験、派遣を通しての成果と感じたこと、そして今後の事後活動についての3点を述べることにする。

■肌で感じた様々な立場での想い

本事業に参加するにあたり応募時に綴った想いが3点ある。これまでのエンジニアとしての仕事や国内外のボランティア活動、そして様々な世界の地を訪れて接した異文化の人達との経験を通してもっと深く知りたい、現地に赴いて自分の目で確かめてみたいと思った内容について振り返りたいと思う。1点目はドミニカ共和国での教育制度や課題に対して民間目線と政府目線のそれぞれの思いを知りたいということ、2点目は日本からの移民の方々と現地で生まれた家族の日本文化に対する想い、そして3点目は電機メーカーに勤める者として日系企業が現地の仕来りやニーズにどのように対応しているのかという点である。政府が主催している事業であるからこそ経験できたことも多々あり、まさに生きた教材であった。

(1)貧困脱出のカギは教育

1点目の教育に関しては現地の小学校や農村地域を訪れて教育制度や環境の実態を肌で感じることができ考えさせられることが多くあったが、その中でも特に地方部と都心部との地域格差を強く感じた。地方部は大人でも識字率が低い地域がありJICAの支援プログラム見学で訪れたダハボン近郊の村にあるピーナッツ工房では23名中22名が自分の名前のみしか書けないという状況にあった。青年海外協力隊の梅林さんのお話では村人の多くは文字だけでなく計算や衛生面に関する教育も受けていないので、そういった環境で事業を進めることの難しさがあるが上手くビジネスとして進めることができたのは現地の頼れる強いリーダーがいたことやドミニカ共和国の人柄、また学校に通っている子供達の手伝いがあったからだと伺い、考えさせられるものがあった。支援とは個人で出来ることには限界があり様々な人達の協力や時には人との巡り合わせという運により成し遂げられるものだということが印象的だった。しかし、局所的な支援には限度があり根本的な解決が求められていることを特に農村部での滞在時に深く感じた。また、この情報社会の現代において同じ国でこれ程の情報格差があるということに驚き、農村部ではこういったインフラ的な要素も教育格差に繋がるのだということの気付きを得ることができた。

一方、都市部については学校の数やカリキュラムはあるが例えば教員が私用で学校から抜け出し授業が成り立たないといったケースがあると話に聞いていた。実際に私立の学校に訪れた時にも教室には子供達の姿しか見えないクラスがあり教員自体のモラル向上が求められるが、その背景には教員への成り易さや低い賃金によるモチベーションの低下が関係しているということをJICAや日本国大使館で伺った。

教育現場を実際に見たことで、メディーナ大統領や下院議長と懇談させて頂いた際に一番力説されていたのが教育に関する内容であったことが素直に嬉しく、その強い信念に感銘した。お話を伺う前まで私は局所的な観点でしか物事を見ていなく、なぜ支援や現場の改善が行き届いていないのかと考えていたが、そもそも根本的な問題が多く解決の為には全体を見ることが大事だということを痛感した。実際に今年再任される前の政権4年間できちんと成果を出していて、例えば午前と午後の二部制であった学校の授業時間が延びていたり、教員の給料が60%も伸びていることが証拠である。一方でドミニカ共和国は世界的に見ても不平等や母子家庭が多いと言われており若年妊娠等の問題が根強く残っている。大統領は学校が教育の現場だけではなく給食の普及により栄養不足を改善したいと考えているが、そのためには学校を全日制にする必要がある。いろいろな課題が交差し合っているが大統領の「教育が貧困から抜け出す唯一の方法」はまさに共感できる言葉である。

(2) 異国で感じる和の精神

2点目はハイチとの国境付近にあるダハボンという街の日本移民の方々を訪れた時の話だが、私はどこか安心感を覚えた。首都のサント・ドミンゴから車で6時間程度も離れた田舎という言葉が合うこの場所で日本を感じることが出来たからだ。日系3世、4世の人達は現地の方との子供が多く顔立ちがはっきりとしていたが、心の表情に日本らしさを感じ取ることができたのも彼らのおもてなしや気配りに日本人らしい心を感じたからだ。特に若くして日本からドミニカ共和国に来られた向井さんや内藤さんの強くそして優しい目には幾つもの苦悩を団結して乗り越えてきたのだということを感じた。実際にお話を伺って驚いたことは、当時その荒れた環境に放り出された先人の方やそのご家族の中には確かに日本政府を恨む人もいるが、お二人とも私は違うと仰っていたことだ。日本に残っていても同じように苦しい生活だったかもしれないし、こちらの方が逆に良かったのかもしれないと現実を受け止めるその力強さに感銘したのを今でも忘れない。時間は取り戻すことができないので悩んでいるより前に進むということを人生をもって証明されている姿に心を打たれた。

ダハボンの移住記念碑前にて日系移民の向井さんにお話を伺う

(3) 日系企業の存在価値

そして3点目は本派遣の中で一番印象に残った日系企業のワコール・ドミニカーナ株式会社への訪問である。ドミニカ共和国では色の違う2つの企業の工場を訪れることになったが、その全く違う性格がとても面白くエンジニアとしてモノづくりとは何かということを改めて考えさせられる機会となった。

最初に訪れたのはドミニカ共和国の特産品であるLa Aurora社の葉巻工場で、実にこの国らしいスタイルが随所に感じられた。それは案内して下さる方が終始葉巻を吸いながら説明していたことや生産現場に陽気な音楽が流れていたり、しまいには従業員が葉巻を吸いながら物を作っていたりとその国民性をそのまま描いたような環境であったからだ。日本ではまず考えられない事ばかりであったが、従業員一人一人が楽しそうに仕事をしているのを目にして日本とは違った仕事に対する感覚があり、どれが正解ということは無いのだということを正直感じた。

La Aurora社の葉巻工場を見学する

一方でそんなドミニカ共和国らしい雰囲気を一掃したのがワコール・ドミニカーナ株式会社の工場見学である。外資企業を誘致するために作られたエリアで税が優遇されるフリーゾーンと呼ばれる地域にある同社は日本企業である株式会社ワコールのグループ会社であり、主にアメリカ向けの製品が多く近年ブラジルに向けても下着類を販売している。工場内は品質がしっかりとコントロールされており、トヨタ生産方式の5Sやかんばんといったいわゆる日本方式の生産ラインが完備されていて、その出来には正直驚かされた。それは葉巻工場を見た後だったからなのかもしれないが、穏やかで良い意味で楽天的なドミニカ共和国の人達に日本人が駐在していない環境の中で品質第一と自分から発言させる現場環境に驚くと共にその手法に強い興味が沸いた。その秘訣はいろいろと培ったものがあると思うが現地社員の方々にお話を伺った際に会社直通のバスがあることや福利厚生がしっかりしていること、そしてなにより会社に愛されているという感覚が家族を大事にするドミニカ共和国の人懐っこい国民性に受け入れられたのかもしれない。また今年、青年省で初の女性大臣が誕生し、大統領の妹さんが議長を務める下院は四分の一以上が女性でありワコール・ドミニカーナ株式会社の女性比率が全従業員の80%という数値からみても女性進出を掲げている国の政策にマッチしている。フリーゾーン自体が雇用を創出し

ていると政府の方が仰るように、このエリアはドミニカ共和国の経済成長を支える要因にもなっている。中南米屈指の7.2%という高い経済成長率は他の国も視察に訪れる程だ。そのような場所で日本企業だからこそ出来る現地の人から見ればユニークなスタイルやアイデアが十分にあるのではないかと本訪問で感じた。

工場だけに関わらず現地の人達を巻き込んで何かを進める時には現地の人達の文化や考えを尊重した上でいかに自分たちの思い入れを共有して現地の人達主体で考えてもらうかが重要なのだと学んだ。

ワコール・ドミニカーナ株式会社にて工場見学前に事業概要について説明を受ける

■事業の中で生まれた新しい感覚

本事業の派遣を通して団として行動していく中で色々な思いや方向性を持った仲間と切磋琢磨し合った日々は自分の中にも仲間の中にも色濃く残るものとなり、また地球の裏側の全く違う世界で2週間にも及ぶ派遣、そして前後の研修に取り組めたことは大きな自信となった。特に私1人だけ年が離れていたのだが逆に素の自分に近い感覚で常にいることができたのも団のメンバーのお陰もあるが、ドミニカ共和国の雰囲気がそうしたようにも感じる。私だけではないと思うがこういった意識はただの仲良し集団ではなく良い意味で意見を素直に言い合える環境の要因にもなっていたように感じる。ただ一時、団が改善に拘り過ぎてネガティブな指摘ばかりが目立っていたが社会での経験談を共有して良い方向に持ち込めたのは自分の中で大きな成果であったと言える。

年齢が高いからといって気持ちが驕ることが無いよう普段から心掛けていたが、団の仲間と移動中や1日の終わりに話をしていると自分の今迄の経験を真剣に聞いてくれる彼らの表情を見て、自分自身の成長を普段から心掛けていた中で逆に自分が社会や海外での経験を伝える立場にもあるのだということが新鮮だった。それは同じ団の仲間だけではなく、他の団や現地青年、各国の代表青年と過ごしている時にも感じることができ、今後の活動のヒントにもなった。逆に学生メンバーからは自分が社会に出たことで忘れている学生時代の熱い想いを思い出させてくれお互いが高められる良い関係にあったと思う。

個人としては駐日ドミニカ共和国大使館訪問時にドミンゲス駐日大使から技術分野で日本とドミニカ共和国の懸け橋になってほしいと言って頂いたことに対して、勤務先のショールームにお招きして各製品の技術力に満足頂けたことはエンジニアとして誇りに思う。これからも両国の友好関係と発展の為に技術分野で努めたい。

■これからも続くバトン、そして絆

今後の活動として真っ先に派遣先での体験や発見について多くの人達に共有し、ドミニカ共和国や内閣府の事業に興味を持ってもらいたい。また社会経験がこの事業に良い風をもたらすと確信しているので個人的には社会人の比率が上がるように様々な場所で伝えたいと思っている。学生時代や若い時にチャレンジするのも良いが社会や海外での経験を積んでから本事業へ参加することによって、また違った経験というモノサシで比較することができるからだ。

派遣時に各地で「日本だったらどうだろう」と感じることが多々あったので、日本について資料や全国各地の催し等を通じて学び直したい。既に全国各地には派遣メンバーの仲間がいて準備は整っている。

最後に貴重な経験をさせて頂いた内閣府はじめIYEOや関係者の方々には深く感謝すると共に今後の活動にて恩返ししたいと思う。